

他の1例に於ては明かな腺管像並に之に隨伴する間質組織も認め得ない。即ち萎縮内膜に一致する而も全例孰れも炎症徴候は證明されない。以上現在まで得た知見によれば、腸チフスに於ける無月經は子宮内膜に對する直接影響によるものではなく、寧ろ子宮より上位臓器の障碍によるものと推論し得る。

47. ビタミン C による月經周期の變動

(金大) 川上十一, 後藤田博之, 笠森周護

「ビ」C は卵巣に作用して先ず微弱な卵胞發育促進作用を現わし、これに後續して強力なルテイン化作用を持続することは、余等の實證發表した所である。よつてこの作用を應用して月經周期を變動させる目的で、現在までに月經周期の整調な健康婦人42名について「ビ」C の一定量を皮下または靜脈内に注射して、39名に於て豫定月經を數日間遲延または前進させ得たのである。この實驗は續行中であるから、例數の増加につれて成績の變動もありうるが、現在までの成績を周期の遲延または前進と注射開始時期との關係によつて、次の如く分類することができる。

(1) 皮下注射の20例では、1日1回100 mg 宛連日8～10日間、體重毎珎12～21 mg の注射を行つて、次の結果を得た。

(i) 月經の遲延したものの13例、遲延日數2～8日、注射開始は豫定月經第1日前7～14日、即ち排卵期またはそれ以後に當る。

(ii) 月經の前進したものの5例、前進日數1～3日、注射開始は豫定月經前12～17日、即ち排卵期またはそれ以前である。

(iii) 例外として豫定月經10日前から注射を開始して10回注射し、豫定月經が1日前進した1例と、同じく10日前から9回注射したが、周期は不變であつた1例とがある。

(2) 皮下注射の他の1例では、15日前から100 mg 宛15回注射したが、周期は變動しなかつたので、次回周期に於て15日前から200 mg 宛15回注射した結果として、周期は8日遲延した例がある。

(3) 靜脈内注射の20例では、200～500mg 宛1日1回2～10回、體重毎珎10～51mg の注射を行つて次の成績を得た。

(i) 月經の遲延したものの12例、遲延日數4～15日、注射開始は豫定月經前3～11日で排卵期以後に當る。

(ii) 月經の前進したものの7例、前進日數1～6日、注射

開始は豫定月經前6～17日、即ち排卵期とその前後に互る時期となる。

(iii) 他の1例では豫定月經5日前から300mg 宛2回の注射を行つたが、周期の變動は現われなかつた。

以上を要するに(1)「ビ」C の皮下または靜脈内注射によつて、大多數の例に於て月經周期を變動させうる。

(2) 注射を排卵期またはそれ以後に開始すると、周期は概して遲延し、排卵期またはそれ以前に開始すると、皮下注射では周期は概ね前進するが、靜脈内注射では必ずしもそうではない。(3)「ビ」C の體重毎珎に對する用量もまた大いに成績を左右する。

48. ワゴスチグミンのマウス性周期 卵巣及び子宮に及ぼす影響に就て

(久留米醫大) 朱 以 春

1940年 Sammel Soskin 等が Prostigmin Methylsulphate を月經の遲延せる成熟婦人に連續使用して妊娠を鑑別し得ることを發表して以來、本邦に於ても同一成分であるワゴスチグミンを使用して追試し何れも90%以上の成績を得て居り、しかも渡邊氏の流産例の報告以外は副作用も極めて輕微である、然し本劑の月經誘發機序に關しては未だ定説なきもの、如く、余は本劑の性週期、子宮並びに卵巣に及ぼす影響等をマウスにつき研索し興味ある成績を得たので茲に報告する。

1) 性週期に及ぼす影響

成熟マウスにては一時的ではあるが性週期が促進され、對照としての鹽酸エピレナミンでは一時的に性週期の抑制されるのを觀察した。思春期マウスに對してはその促進作用殊に著しく、未だ完全な發情期を示さないか又は著しく休止期の永いマウスは正常の性週期を示し得るに至る。

2) 卵巣及び子宮に及ぼす影響

肉眼的所見、子宮卵巣共に著しく充血し、殊に卵巣では暗赤色をなしイチゴ様外觀を呈するものすらある。子宮は腫脹し光澤ある外觀を示す。

組織學的所見、正常マウスでは子宮腔擴大し、腺腔著しく屈曲を呈し、之等の像は發情期のみならず休止期のものに於ても尙著明である。卵巣に於ては僅かに退行期黃體を認めた外は發情期は勿論休止期に於ても成熟卵胞を始め種々の發育程度の卵胞を多數に認む。思春期マウスでは休止期に於て子宮腔稍々擴大し、腺腔は尙狭く、圓形或は橢圓形を呈し屈曲を示さない。卵巣は充血性で卵胞腔を有する大卵胞を始め種々の發育程度の卵胞を認